

論文要旨

学位論文題目：「ムラービト朝の統治理念とマグリブ社会：軍人とウラマーと聖者」

氏名：飛田（野口）舞子

本論文は、ベルベルによって建国され、マグリブからアンダルスを支配したムラービト朝（1061年頃-1147年）について、アラビア語の年代記や伝記集、書簡といった歴史史料をもとに、政策や在地社会との関わりをマグリブ社会に焦点を当てて検討することで、王朝の統治の理念型（メカニズム）を明らかにしたものである。

ムラービト朝は、西サハラ在来のベルベルによって興された宗教運動を端緒とし、周辺部族や地域を征服して、それまで各地に勢力が乱立していたマグリブ地域（北西アフリカ）を初めて一体的に支配した。その後、同王朝は、アンダルス（ムスリム支配下のイベリア半島）へも進出したため、結果として、マグリブとアンダルスが統一され、「帝国」ともよばれる広大な領域が現出した。他方で、ムラービト朝の、支配者層はベルベル軍人であったため、外来政権と位置づけることができる。歴史的に、イスラームの諸国家は、支配者がイスラーム法に則って統治を行い、これを住民が承認することで、統治の正当性を得るといふ、契約関係に基づいて成立していると考えられており、ムラービト朝の統治構造を明らかにすることは、こうしたイスラーム国家の多様なあり方を理解することに通じる。

従来のムラービト朝研究では、戦争や政治的事件を扱う政治史研究と、ウラマーやイスラーム法の適用を扱う社会史研究が進展したが、これらは基本的に、当時の先進地域であったアンダルスの事象や住民に注目してきた。また、王朝を構成するアクターとしては、ベルベル軍人と、彼らを支持しアンダルスに招いた同地のマールク派法学者・ウラマー（イスラーム知識人）の関係ばかりが議論され、マグリブのウラマーや、12世紀前半以降マグリブに台頭してきたスーフィーや聖者に分析が及んでいない。本論文は、ムラービト朝における諸政策から支配の正当性の主張とその実態を明らかにした上で、王朝とマグリブの在地住民との関係を分析し、ムラービト朝全体の統治メカニズムを多面的に検討する。

本論文の前半部では、正当性が主張される手段と考えられる、君主を承認する儀礼であるバイアの実施や、ジハード（聖戦）の遂行、非合法的な税の廃止といった儀礼や政策の通時的な検討を行った。バイアの実施では、対面儀礼としてのバイアにおいて、王朝の権力構造の核がベルベルの部族の軍人集団の紐帯によって保持される一方で、支配領域の拡大とともに、文人等の多様な参加者が認められる。また、書簡を用いたバイアを採り入れることで、支配地全土の住民から承認を取りつけ、服従の契約を結ぶことを可能にした。王朝はバイアの手続を定式化し、王権の正当性を主張し、住民の服従を確認する実質的な機会とした。

他方で、ジハードの遂行や非合法的な税の廃止は「正しい」ムスリム支配者であることを示す、より現実的で歓心を得やすい政策であった。ただし、これらの政策は、実行が難しくなれば支持と正当性を失

うという、実質的な評価と統治の安定性に直結する両刃の剣であった。そして、ムラービト朝に対する人びとの失望は、まさにこの二つの問題が絡み合っただけで生じたと考えられる。さらに、これらはともに、イブン・トゥーマルト率いるムワッヒド集団によって批判され、ムワッヒド朝（1130-1269年）のイデオロギーや、ムラービト朝打倒が正当であることの根拠として、彼らの主張に逆用された。このため、この二つの政策は支配の正当性を主張する柱でありながら、持続的な正当性は保証しなかった。以上から、王朝権力は、パイアの実施によって理念的で持続的な正当性を獲得し、ジハードと非合法的な税の廃止によって現実レベルでの正当性を得ていたといえる。

本論文の後半部では、ムラービト運動から王朝の形成・拡大の過程で生じた権力構造の変化を明らかにした。在地社会に目を向けた場合、この時代のマグリブはアンダルスに比し、イスラーム化や都市化は遅れ、ウラマーも少なかった。しかし、11世紀後半のマグリブ出身のウラマーの活動や王朝との関係を個別に検討すると、ムラービト運動を率いた宗教指導者の没後は、軍人指導者であるバルベル諸部族長が政治・軍事的権力を継承し、バルベル軍人と在地ウラマーがそれを支える政治体制ができていったことが明らかとなる。また、セウタやフェスなどのマグリブの主要都市出身のウラマーと支配者との協働関係は、アンダルス進出以前に形成されており、こうした関係はアンダルス支配にも援用された可能性を指摘できる。

従来のムラービト朝史では、支配者によるスーフィーに対する敵視が定式化されてきた。しかし、12世紀前半のマグリブでは、スーフィーや聖者の活動や社会的な影響力が認められ、ムラービト朝権力は彼らを在地有力者と認め、関係を取り結ぼうとしていたことがうかがえる。スーフィーや聖者からすれば、権力は忌避すべき存在であったため、彼らとの関係は、ウラマーとの間に築かれたような協働関係とはならなかったが、支配者の接近は、アンダルスにおいては見られないマグリブ特有の現象である。こうした権力と在地住民の関係の違いは、マグリブとアンダルスの社会構造の相違に対応するものであり、ムラービト朝は地域によって統治の手法を変えることによって、広大な領域を支配していた。そして、このような支配正当化の主張や統治の手法は、西方イスラーム世界の後続王朝によって批判や模範の対象となった。